大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：八木 美華（グローバル共生教育論コース）

■研究題目

成人の経験を資源とする音楽学習に関するアクションリサーチ

■研究代表者・分担者 氏名

八木 美華（グローバル共生教育論コース）（代表者）

■研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）

１．背景と目的

少子高齢化と生涯学習推進の中、民間の音楽教室でも音楽初学者の成人や高齢者を対象とした講座が増えている。従来、音楽教室の指導対象は子供であり、指導内容は演奏技術・技法の教授が中心であることが多い。一方、成人教育の観点からみると、成人の学習では、技術・技法の教授だけでなく、一人一人の人生や生活に基づく経験を重視した学習のあり方が求められる(ノールズ 2002)。しかし早期より専門教育を施された成人指導者の音楽学習経験と、成人の音楽初学者が必要とする学習の質は異なる。成人音楽初学者が出会う大きな困難は、成人初学者の持つ豊かな人生経験と既定の音楽学習のあり方にこうした齟齬が生じている点にある。そこで本研究では、成人の学習資源として「昔の遊び」に着目、遊びと学習が地続きであるという観点から、成人の音楽学習のあり方について検討を試みる。

ここでの「昔の遊び」は身体動作や歌唱を伴うものであり、「昔の遊び」に着目する理由は次の 2 点である。第一に「昔の遊び」には音楽の基本的要素「リズム」「メロディ」が内包されている。第二に、子供の間で創意工夫される遊びは「主体的」「即興的」であり、表現力の礎となる。これらは、音楽の基礎的能力との関連性が非常に深く、現に「昔の遊び」は幼児教育、学校教育分野において実践・研究され、音楽教育分野においても「わらべ歌」遊びが有益な教材として注目されている。一方、成人の音楽教育においては、歌唱指導(小畑 2002、2005)において「わらべ歌」「童謡」が教材として取り上げられるが、身体動作を伴う「昔の遊び」を成人の音楽学習の資源とする例はない。

これまでの成人の音楽教育や音楽学習についての研究を概観すると、転機は、生涯学習推進の潮流において、生涯学習機会の中に文化活動が含まれたこと(生涯学習振興法 1990)、1994 年の音楽文化振興法において「音楽学習」も「生涯学習の一環」と明記され

たことが挙げられる。それまで子供を主な研究対象としていた音楽教育研究においても成人を対象とする研究へと目が向けられるようになった(杉江 2009)。

音楽活動と学びに関する概念の一つとして「生涯音楽学習」(丸林 1999)があげられる。丸林は、アメリカに由来する成人教育や成人学習の理論に照らし、生涯教育や生涯学習推進の潮流の中で行われた市民参加型の音楽文化活動の事例研究を通じて、成人音楽学習が「理論の欠落した音楽学習」(1992)であること、音楽の「コミュニティ形成」時に、「自己決定性」「自立性」の要素が見いだせない成人参加者(学習者)が存在すること(2001)などを指摘、生涯学習としての機能に疑問を呈した。一方で、余暇活動として行われる音楽活動に対し、「べきもの」ではなく「あるもの」として、現実の人々の音楽的営みから多面的な意義や機能を捉える必要性も論じられている(杉江 2009)。

このように生涯学習と音楽の学びの間に理念や理論が定まらない中にあって、川村は、成人音楽学習の理念的・方向論的課題ついて検討し、ピアノサークルを対象としたナラティブ(物語)アプローチによる対話的空間醸成と学習支援実践についての研究を行った(2003a、2003b、2004)。丸林によって指摘された成人の音楽学習の課題(丸林 1992、2001)が、「学びの共同性」の欠如によって生み出されるとした川村は、学習者と指導者・学習者同士による「学びの共同性」を中核に、合わせてこの学びのプロセスや対話的空間を作り出す力量を含む指導者の専門性について論じている(2003b、2004)。さらに、川村は、音楽の学びをお互いが主体となるような関係で、共同・創造が可能な学びとして問い直すことの必要性から、中野(2001)で双方向的、全体的、ホリスティックな「学習」と「創造」の手法とされる「ワークショップ」モデルによる学習を提案した(2003a)。

それ以降の成人を対象とする音楽教育や音楽学習実践に関する研究は、三上・堀(2014、2019)、古庵(2016)、元吉(2016)などピアノ学習に関する分野において、成人の特性を生かした楽器の演奏技術・技法習得のための支援の方法や教材に関する研究の蓄積が進んでいる。一方で、それらの演奏技術・技法実践の際に不可欠となる読譜力を含む成人の音楽基礎能力向上とその学習支援に焦点を当てた研究や、川村が指摘したような対話的空間の醸成、すなわち成人の音楽学習における「学びの共同性」を実現する手法の一つとして、成人の音楽愛好者を対象としてワークショップを用いた実践・実証的研究は見当たらない。

一方、国内の成人教育・成人学習研究が依拠している海外の動向に目を向けると、近年の成人を対象とする音楽教育・音楽学習研究では、「成人」と「コミュニティ」がキーワードとなっており、また、学習者とともに、音楽家や音楽教師の成長にも着目されている(新藤 2019)。例えば、Joseph & Southcott(2015)は、オーストラリアのホーソン第三世代大学合唱団の活動調査を通じて、高齢者の様々な参加要因を明らかにしたが、その調査結果は、音楽との関わりと社会的なつながりという2つのテーマに分けられ、継続的な合唱団(＝集団)への参加が、参加者に「友情」「親交」「幸福」「帰属意識」「受容性」の機会を

与えたと報告している。このことは、川村が指摘する成人の音楽学習における「学びの共同性」に何らかの示唆を含む。

また、Roulston (2010)は、近年の成人教育分野の研究動向を概観し、テーマを①成人の学習に対する志向性、②成人の学習と子供の学習の対比、③成人学習における「身体化」、④成人の学習と認識に関する非西洋的視点、でまとめ、それらの知見が音楽教育者にもたらす価値を明らかにしている。各テーマの知見から本研究に関連すると思われる内容を抽出すると、①学習者が活動や学習機会に参加する理由は複数かつ複雑であり、学習理由は時間と共に変化する可能性がある、②成人は音楽教師が活用できる学習資源をもたらす。また、成人学習者にとってはアンサンブル(＝グループ活動)が学習の成功機会の重要な特徴である、③学習が「頭だけではなく社会的文脈と身体の中で起こる」(Freiler2008)ことを注目させる必要性がある、④多くの非西洋圏では学習は共同体であり、生涯に渡ってインフォーマルである、とまとめられる。特に②～④の知見が本研究に大きな示唆をもたらしている。

これらを踏まえ、本研究では昔遊びを成人の音楽学習における資源と位置づけ、成人の音楽学習に昔遊びを導入する。加えてその資源を用いた共同的な学び、すなわち学びの共同性の実現とその実現の場である対話的空間醸成のためにワークショップの手法を用いる。これにより、昔遊びをテーマとするワークショップが成人参加者の音楽学習や学びに向かう行動にどのような影響があるかを検討する。これが本研究のリサーチクエスチョンである。

なお、本研究の独自性としては、複数のワークショップを通じ集団的な学習の場を省察的に構築することにある。参加者は 1 回目のワークショップで個人の昔の遊びを振り返り、他者に紹介、共に遊びながら学習する。その内容を次のワークショップで改めて振り返ること、つまり、成人の学習や学習支援で大切な要素とされる省察(クラントン 2010)を共同的に行うことで、参加者個人の自己形成につながることも期待できる。

研究の方法としては、報告者によるアクションリサーチを採用した。報告者は現在、成人を対象とした合唱などの音楽指導に携わっており、研究は合唱を中心とする音楽愛好者を中心に複数の成人を対象として行ったものである。報告者はコーディネーター兼共同学習者として参加しながら、昔遊びを通じた学習と共同的な省察による参加者の変化をリサーチした。

２．実施内容

2-1 ワークショップ実践概要

・ワークショップ：全 4 回

・会場：仙台市太白区内文化施設(2 回)、市民センター、集会所

・参加者：以下の通り

参加者	性別・年代	WS(1)	WS(2)	WS(3)	WS(4)
A	女性・70代	○	○	○	○
B	女性・50代	○	○	○	○
C	女性・60代	○	○	－	－
D	女性・40代	○	○	－	－
E	女性・60代	○	－	－	－
F	女性・70代	○	－	－	－
G	女性・60代	－	○	－	－
H	女性・70代	－	－	○	○
I	女性・70代	－	－	○	○
J	女性・40代	－	－	○	－
K	女性・40代	－	－	○	－
L	女性・60代	－	－	－	○

2-2 ワークショップ実践内容と調査方法

・ワークショップ実践内容

(1) 2022年8月　昔遊びワークショップ①

実施時間：120分／参加者数：6名

内容：成人が持つ昔遊びの収集と遊び合いを通じた共有を行った

(2) 2022年9月　振り返りワークショップ①

実施時間：120分／参加者数：5名

内容：(1)の内容を振り返り、音楽学習(読譜)との関連付けを行った。

(3) 2023年1月　昔遊びワークショップ②

実施時間：90分／参加者：6名

(1)、(2)で集まった曲目リストからその場で選び、遊び合いを通じた共有を行った

(4) 2023年2月　振り返りワークショップ②

実施時間：90分／参加者5名

(3)の内容を振り返りながら、それぞれの曲について語り合いを行った

・調査方法

アンケート：基本属性(年代、音楽歴)、参加したワークショップに関する自由記述

ワークショップ参加状況の録画・録音の分析

３．考察

上記実践事例を以下の3つの観点、①テーマが昔遊びであることの影響、②音楽学習(音

楽基礎能力向上、知識・技術等習得)資源としての効果、③対話的空間としてのワークショップ型の学びの場の影響、から考察する。なお、本研究においては、昔遊びは伝承遊びや参加者が過去に経験した遊び全般、歌遊びは昔遊びのうち歌唱に身体動作を伴うもの、歌遊びのうち作者不明の伝承的な「子どもの遊びのための実用歌」(日本童謡事典 2005)をわらべ歌とした。

①テーマが昔遊びであることの影響がみられる事例

それぞれの人生において体験・経験した遊びを共に遊び、語り合う内容だったため、実践者含め参加者同士の対話が非常に活発となり、参加者が全員何らかの発言をしていた。また、昔遊び、特に歌遊びは、地域や世代によって遊ぶ動作や唱えられる言葉が異なることもあり、それぞれの自由なデモンストレーションによって見えてくる共通点や差異点が、共感や驚きとともに共有された。

個別の事例としては、参加者Aが、初回のワークショップ開催時に実践者が募集した昔遊びの情報に応える形で、自らの記憶と経験を頼りに独自の曲目リスト(歌詞入り)を作成した。作成にあたってはわらべ歌の由来や海外の類似性のある遊びを調査し、情報を付記していた。さらに外国籍の家族に母国での昔の遊びを尋ねるなど、昔遊びに関連して興味・関心の対象を広げた様子がうかがえた。また、参加者Hは、昔遊びワークショップ②でA作成のリストを受け取った後、自らも昔遊びの記憶をたどり、覚えていた身体動作の伴う歌1曲について歌詞を書き出したこと、全て書き出せたため驚いたことを振り返りワークショップ②で報告している。他の参加者の中でも、幼少期の歌遊びが生涯に渡って心身共に残っていることが語られた。

②音楽学習(音楽基礎能力向上、知識・技術等習得)に関する事例

参加者の中でわらべ歌の自由さ(=汎用性や即興性)への気づきがみられた。また、口伝であるわらべ歌が記譜可能なものであること、手足を動かす遊びに付随する唱えに音程とリズムが存在することに驚いた参加者が複数いた。

参加者 B と G は、複数のわらべ歌の旋律に共通する雰囲気を感じ取った発言をしているが、この雰囲気の把握は旋律に用いられている音階の共通性が関係しているため、適切な指導があれば読譜力を含む音楽基礎力の向上に直接的につながるものである。実際、参加者Dは、既知の歌遊びであれば階名唱法による視唱(楽器等の道具の助けを借りずに音符を見て歌うこと)が容易に感じられると発言している。

また先述の H が自らの振り返りを紹介する際に、歌詞の時代的背景に言及したことは、わらべ歌と時代の関係性(音楽史)へのまなざしや興味の表れと言える。

③対話的空間としてのワークショップ型の学びの「場」の影響に関する事例

参加者Bは日本語堪能な中国人であるが、初回のワークショップへの参加後、歌と遊びを通じて、交流への自信と意欲が湧いたことを報告、続く振り返りワークショップでは、仲間がいて集団でやることが大切であると発言している。さらに最終回のワークショップ

では自国の子守歌を全員の前で美しく独唱し、他の参加者によい音楽体験(鑑賞)を提供した。他方、最終回のみ参加したＬは、ワークショップの居心地の良さに言及しながら、体験や経験、理論と実践の必要性について述べ、さらに後日のアンケートには過去の体験への意味付けをする記述がみられた。

なお、参加当初は「交流」についての言及が多かった参加者Ｂであるが、最終の語らいの中では「メロディ」「リズム」や、階名「レ」(日本のわらべ歌に多く見られる旋律の終止音)に言及するなど音楽の基礎的用語を用いた発言が増えていた。また、今後も自らで歌遊びを学ぶ意欲を見せるなど、自らの力で学びに向かおうとする姿勢がみられたことは本研究の成果の一つとして挙げられる。加えて、児童館で働いている参加者Ｊが、本ワークショップで知った遊びを自らの子どもや児童館の子供たちに紹介・実践するなど、子供たちの生涯の音楽の学びにつながる可能性を広げたことも研究の成果として報告する。

以上のことから、昔遊びをテーマにすることにより経験豊かな参加者が自らの体験を生かしながらそれぞれの学びを深め、遊びの伴う和やかな雰囲気における集団的な語り合い「対話的空間」を通じて自らの経験への新たな意味付けや行動変容につながったことなど、学びの共同性が実現されていたことが明らかになった。

４．今後の課題

今後の課題としては次の３点があげられる。

第１点は、調査対象者の偏りである。今回の参加者は全員女性だったため、現行では本研究の内容は一般化しにくい。また、報告者の関連する合唱団員を中心とする参加者であったこともあり、多少の音楽活動経験を有しており、「音楽初学者」とは言い難い。「成人音楽初学者のための経験を生かした音楽学習」とその支援手法の探求のためには、今回の結果を踏まえつつ、より音楽学習経験の少ない人々への実践の試みが必要となる。

第２点は、ワークショップ型の学びの場の醸成である。実践者も参加者も従来の音楽教育・学習の形に慣れており、かつすでに指導者と生徒という関係性の下で音楽活動を経験しきたことから、今回の研究が本当の意味で、双方向的、全体的、ホリスティックな「ワークショップ」型の実践になっていたかは検証の余地がある。

第３点は、経験である「遊び」を成人の「学び」につながるものとして参加者にわかりやすく提示できなかったことである。この原因にはそれぞれが持つ「音楽学習」の意味や意義のあいまいさが考えられる。成人の経験を実際の音楽学習(基礎能力の向上、知識・技術の習得)に生かすための支援のプロセス、アプローチ、具体的な教授手法や場の研究と並行して、生涯を通じた「音楽学習とは何か」という理念や概念の整理が必要となるだろう。

参考文献

小畑千尋(2002)「『音痴コンプレックス』を持つ成人男性を対象とした歌唱指導研究」学校教育学研究論集 5、東京学芸大学、pp.141-153。

小畑千尋(2005)「『音痴』の心理面－成人を対象とした『音痴』克服のための歌唱指導を通して－」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.2、日本音楽教育学会、pp.107-115。

川村有美(2003a)「音楽教育における方法モデルと教材の組織に関する研究－ワークショップモデルの検討を通して－」『教材学研究』14 巻、日本教材学会、pp.67-70。

川村有美(2003b)「音楽指導者の専門性に関する一考察--成人教育における指導者を中心に」『音楽教育学研究論集』5 巻 pp.13-21。

川村有美(2004)「物語としての音楽の学びに関する一考察－成人のピアノ学習を中心として－」『学校教育学研究論集』(10)、東京学芸大学、pp.61-72)。

クラントン、P.(入江直子・豊田千代子・三輪建二訳)(2010)『おとなの学びを拓く—自己決定と意識変容をめざして－』鳳書房。

古庵晶子(2016)「中高年世代を中心としたピアノ学習におけるつまずき－成人用ピアノ教則本のあり方について－」『関西楽理研究』(33)、関西楽理研究会、pp.70-87。

新藤浩伸(2019)「社会教育・生涯学習と音楽」『音楽教育研究ハンドブック』日本音楽教育学会、音楽之友社、pp.28-29。

杉江淑子(2009)「10 年間の研究動向－生涯学習社会における音楽教育研究－」『音楽教育の未来』日本音楽教育学会編、音楽之友社、pp.252-265。

中野民夫(2001)『ワークショップ－新しい学びと創造の場－』岩波新書。

上笙一郎編(2005)『日本童謡事典』東京堂出版。

ノールズ、M(堀薫夫・三輪建二監訳)(2002)『成人教育の現代的実践－ペダゴジーからアンドラゴジーへ－』鳳書房。

丸林実千代(1992)「生涯教育としての音楽教育の構想－「成人教育学(Andragogy)」による成人の音楽学習の事例分析を通して－」『音楽教育学』第 21-2 号、日本音楽教育学会、pp.45-56。

丸林実千代(1999)『生涯音楽学習入門』音楽之友社。

丸林実千代(2001)「音楽のコミュニティ形成と市民の生涯学習－市民参加型音楽活動の事例分析を通して－」『音楽教育学』31-2・3 合併号、音楽教育学会、pp.22-32。

三上香子・堀薫夫(2014)「アンドラゴジーの視点からみた成人のピアノ教育における学習指導に関する研究」『音楽学習研究』音楽学習学会、pp.49-60。

三上香子・堀薫夫(2019)「マルカム・ノールズのアンドラゴジー論に基づく成人へのピアノ指導の実践的研究」『大阪教育大学紀要』第 67 巻、pp.237-244。

元吉ひろみ(2016)「成人･高齢者のピアノ学習」『音楽教育実践ジャーナル』14 巻 pp.77-82。

Dawn Joseph, Jane Southcott (2015) Singing and companionship in the Hawthorn University of the Third-Age Choir, Australia, *International journal of lifelong education, 34(3), pp. 334-347*

Kathryn Roulston (2010) `There is no end to learning': Lifelong education and the joyful learner, *International Journal of Music Education, 28(4), pp.341-352*